

終助詞「よ／ね」の機能再考

— 文脈指定機能を中心に —

大 浜 るい子

An Analysis of Sentence Final Particles “yo” and “ne”

Ruiko OHAMA

0. はじめに

終助詞「よ／ね」の機能については、これまでに様々なことが言われている。大きく分けるとモダリティ機能（大曾 1986, 陳 1987, 益岡 1991）、共有知識の指示機能（神尾 1990, 金水 1991）、談話管理機能（金水 1993）、対話調整機能（片桐 1995）、そして解釈のための文脈指定機能（大浜 1996, 山森 1997）、共通の背景作り機能（Itani 1996）などである。これらの機能は、「よ／ね」がもつばら会話に使用されるという点を受け、会話者の知識や判断、話者の認知過程や受容状態、発話解釈に必要な文脈など、会話を成立させる様々な要素に関連づけられているが、それらは、異なる要素に特定された異なる機能である。しかし、また一方でこれらの機能には共通点もある。それは、「ね」に関しては「あるものとあるものが一致する／共有する／矛盾しない／平行する／食い違いがない／リンクされる」、そして「よ」に関しては「あるものとあるものが不一致である／共有しない／矛盾する／対立する／食い違いがある」と指摘されることである。

本稿は、このように共通点を見つけながらも、それぞれ異なる機能を提案するに留まっている先行研究を、文脈指定機能に統合し、すべてのタイプの「よ／ね」を包括的に説明できるように整備するものである。

1. モダリティ機能と共有知識の指示機能

これらの機能に共通した特徴は、話し手と聞き手間の知識や意向の異同を「よ／ね」の付加と関連づけている点である。モダリティ機能では一致か不一致かの話し手の判断を表示するものとして、共有知識の指示機能では会話者間の情報の帰属先を表示するものとしてとらえられている。ところで、一致／不一致や情報の帰属先を判断する基準としては、情報の縄張り（神尾 1990, 岡本 1993）と知識の确实

性（金水 1991）があげられているが、いずれも似た結果を得ており、(1)聞き手の縄張りにより近い情報、聞き手の方がより確かに知っている情報には「ね」の付加が必須であり、(2)話し手の縄張りと同じ程度の縄張りのどちらからも等距離の情報、あるいは話し手と聞き手が同程度に知っている情報には「ね」の付加が可能である、とまとめることができる。このような考え方に対して、「知っている」ということが客観的に保証できないため、有効ではないという指摘（山森 1997）がある。しかし、客観性は必要なく、話し手自身の判断こそが重要であると思われるので、筆者は(1)(2)の指摘を有効であると判断しているが、ここではそれを、以下のように読み替えたい。すなわち、話し手が自分にとって「非独占的情報」とであると判断した情報に「ね」を付加する。

2. 談話管理機能と対話調整機能

ところで、1で紹介した議論が前提にしている事例には偏りがあるとの指摘がある。一つは、話し手の縄張りに属する情報や、聞き手より話し手の方がよく知っている情報にも「ね」の付加が可能である（例1, 2参照）というものである（蓮沼 1988）。もう一つは聞き手の縄張りに属する情報には「ね」の付加が必須であるとされる（神尾 1990）が、「よ」の付加も可能である（例3, 4参照）という指摘である（大浜 1996）。

〈話し手の縄張りに属する情報の場合〉

（金水1993の例より）

- 例1 P: 勤めて何年目ですか
Q: もう20年になりますね

〈話し手の方が聞き手よりもよく知っている情報の場合〉

（金水 1993の例より）

- 例2 P: 今何時ですか
Q: ええと、7時ですね

〈聞き手の縄張り」に属する情報の場合〉

例3 あなたがお母さんですよ

例4 君は医学部出身だよ

前者の例は「計算が必要な情報」として北野(1993)、金水(1993)により次のように説明されている。自分の名前や年齢を答えるのとは異なり、勤続年数を割り出したり時計を見て時刻を読みとるには特殊な計算が必要である。すなわち状況と表現との同一性が即座に得られず、その点で不安定な要素があると言える場合に計算(=マッチング)が行われ、その計算の結果、状況と表現が同一視できると判断した証として「ね」がつけられる(金水 1993:120)と言う。言い換えれば、即答できずに熟考して得られた情報には、熟考の過程があったことを表明するために「ね」が付加されることがあるということであろう。筆者はこれを次のように解釈し、1で確認した「話し手の非独占的情報」に分類することで、他の事例と同列であると考えている。すなわち、熟考せずに答えられるほど確実な知識として所有していたものではなく、自分以外の人間(聞き手を含む)であっても必要な情報さえ得られれば(例えば時計を見せられるなどすれば)同様の結論を導き出すことができるという点で、話し手が独占している情報とは言えないのである。片桐(1995)が「ね」について「何らかの情報源から当該情報を得たが、必ずしも受容できていないことを示す」と述べている(42)が、受容できていないというより、受容しても自分のものにしたとは言えないという方が正しいだろう。

もう一つの問題は、明確に聞き手の縄張り」に属する情報であっても「よ」の付加が可能であるというものである。例3、4はいずれも相手の縄張り」に属する情報である。これらの発話が自然である状況とは、例えば叱責、非難、激励のような場面である。例3では子供の異常さに気づけなかった母親を叱責する、あるいは子供を育てる自信がないと落ち込む母親を激励する、例4では血を見ることのできない男にあきれ、あるいは基礎的な医学的知識のない男を非難するなどである。「よ」は一般的に「聞き手が知らないことを伝える」などの機能があると言われる(陳 1987)が、ここでの発話は「あなたが母親である」や「君は医学部出身だ」を伝達するものではない。それは聞き手には既知のことであるからである。そうではなく、話し手は当該の発話から「母視であれば子供の異常さに気づくべきだ」や

「医学部出身であれば基礎的な医学的知識はもっているべきだ」を聞き手が推論することを期待している。すなわち、話し手は発話直前の聞き手の態度に賛同できないことを示そうとしている。そのために使用されるのが「よ」である。反対に例3、4の「よ」を「ね」に置き換えると、話し手と聞き手の間に考え方のずれは見られなくなる。これは、「ね／よ」が現行発話の解釈に必要な文脈を、先行文脈を継続／変更するという形で作らせるからであるが、これが次節で見る文脈指定機能の考え方である。

3. 文脈指定機能

従来の先行研究の多くが文を対象にしている中で、この機能を主張する大浜(1996)、山森(1997)は、分析対象を発話の連鎖に広げている点で注目される。発話の連鎖が対象となる場合、連続する発話間に首尾一貫性(coherence)があることが考察の前提になる(Halliday/Hasan 1976)。すなわち、現行発話(あるいは現行発話が解釈のために要請する文脈¹⁾)と先行発話(あるいは先行発話が解釈された文脈)とが関連していなければならない。関連の仕方には、2つの発話(あるいは文脈間)が整合的か非整合的か²⁾のいずれかである(山森 1997:139)。すなわち、会話をこれまで通りの方向で進めるのか、それとも異なる方向をとるのかという選択である。前者を「ね」が、後者を「よ」が表示するとされる。例3、4で見た聞き手の縄張り情報に「よ」が付加された例は2つの文脈が非整合であった例である。例5では、会話が「あの子に興味はない、できれば関わりをもちたくない」という方向で展開している中で、それに賛同する発話は「ね³⁾」(発話番号3、6、10)と共に、それに対立する発話は「よ」(8、11)と共に発せられ、「よ／ね」が、発話の解釈に必要な文脈を操作しているのがよく見てとれる。会話では、会話者の刻々のやりとりがその方向性を決定していくという特徴がある。その方向づけを引き受けているのが「よ／ね」であるという考え方は、非常に説得的である。1で見た情報の帰属先との関係については次節で論じることにする。

例5 <あの子をストーキングする女の子がいるという話を受けて>

1 A: あの子の何が知りたいんやろ

2 B: はははは(笑)、僕は何も知りた

くないです

- 3 A: なっ
4 B: うん
5 C: は一何も知りたくない
6 B: 何も知りたくないっすね
7 A: うーん言うてもつきあっていかな
きゃいけんのや俺ら
8 C: そうよ, あの子はもう絶対入る,
もう抜けんからね
9 B: いや, もういい
10 A: つれーの (つらいな)
11 C: でも料理できるよ, あの子

4. 共通の背景作り機能

ところで、「よ」は通常文末に使用されるのみであるが、「ね」は文末以外に、文中、文頭、単独で、と様々に使用される (Tanaka 2000)。

<文末位置>

- 例6 昨日面白かったね
例7 この辺, おいしいラーメン屋ないね

<文中位置>

- 例8 目薬をもらってね, 3カ月くらいね, 続けて一日4回ずつだから, やんなさいって言われてね, 覚えちよる自信なんてないよ, あたし。

<文頭位置>

- 例9 ねえ, ミキ, 原チャで宮崎帰ったりせんのん?
例10 ね, ね, あのね, この間NHKでね, ... (山森 1997の例より)

<単独で>

- 例11 P: わからないね, まだね
Q: ねえ
P: うん

3で見た大浜(1996), 山森(1997)による文脈指定機能では、主に文末位置のものが対象になっていた。しかし、文中や文頭の例では現行発話の命題内容を特定できないため、先行発話や先行文脈との整合/非整合などの関連づけが難しい。また文末の「ね」

であっても会話の冒頭の文に出現して、先行発話や先行文脈を見つけにくいものがある。このような例はどう説明すべきだろうか。問題は2つある。一つは先行発話や先行文脈に関連づけるべき発話内容が見つけれないという点、もう一つは現行発話と関連づける先行発話や先行文脈が特定できないという点である。前者については人間の情報処理における最適な関連性の追求 (Sperber/Wilson 1986) という視点から説明できると思われる。後者については Itani (1996) の「共通の背景 (=common ground) を確立する」という考え方がヒントを与えてくれるだろう。

では第一の問題から見ていこう。まず文末位置の「ね」の場合 (例6, 7), 聞き手にはこの発話だけで、発話が表現している以上のこと、すなわち昨日の出来事の詳細や、近隣のラーメン店の様子が色々と思ひ起こせることがわかる。それは話し手と聞き手が共に体験したことを話題にしているからである。共通の体験がない聞き手にこれと同じことを思い起こさせようとすれば、話し手はまだ多くの情報を提供しなければならないだろう。そんな時に使用されるのが文中の「ね」であると思われる。関連性理論 (Sperber/Wilson 1986) では、人間は情報処理において常に最適な関連性を追求するという。最適な関連性とは処理の労力と得られる効果が最も釣り合いがとれる場合である。効果が同じであれば労力の小さい方が最適な関連性をもち、労力が同じであれば効果の大きい方が最適な関連性をもつ。例8は例8-1と比べれば処理労力は大きいですが、共通体験をもたない聞き手にはそれに見合う多くの情報が得られている。共通の体験をもった相手であれば、同じ効果を例8-1が作り出す。文末の「ね」と文中の「ね」は、同じ効果を産み出すためのものでありながら、聞き手の知識の有無によってかける労力に差をつけたものであると言える。

- 例8-1 目医者がか色々言ってたね。覚えちよる自信なんてないよ, あたし。(作例)

ところで、このようにして得られた効果はいったい何だろう。Itani (1996) は「共通の背景 (=common ground)」であると言う。共通の背景とは、そもそも Brown/Levinson (1987) が positive politeness の方略の一つとしたもので、同じ集団のメンバーが同じ考えを共有していることを表明し、相手との連帯

を図ることである。しかし、Itani(1996)から推察すると、単なる連帯ではなく、会話の開始や継続に不可欠な、前提となる知識のことが考えられているようである。Itaniは「ね」はその共通の背景の確立を実現したいという願望の表明であるという。例6, 7, 8-1では、共通の背景となるその知識は、当該の発話以前に既に会話者達が所有している知識の集合の中から選び出されている。だから、ここで使用されている「ね」は、共通の背景を確立したいという願望であると同時に、当該発話の解釈のために先行文脈と整合する文脈を指定するという機能であると主張することができる。しかし例8では、この情報は発話以前の聞き手の知識の中にはなかったものである。文中の「ね」が作り出す共通の背景は、どのように考えれば、先行文脈に整合する文脈の指定機能であることができるのだろうか。これが第二の問題である。ここで、我々は文中の「ね」が表わしている事柄の性格を見るべきである。文中の「ね」は、例12や例13が示すように、「事実の描写+コメント」という形の発話に多く現れる(例8も)。前半で話し手の体験した事実や出来事を描写し、後半でそれに対する話し手自身のコメント(下線でその部分を示す)が続くというものである。

例12 あのねえ、高校の時の先生がなんかねえ、
酔がいいってねえ、酔でね、なんかリンス
代わりにしとったけどな、すごいなんかテ
カテカしとって、なんか縮れとったけどな、
もしかしたら、いいかもしれん

例13 なんかねえ、そのラーメン屋にねえ、行っ
たらねえ、なんかねえ、チャーハンがペ
チョツとしてるしねえ、もう麺はちょっと
のびとるしねえ、エーツで最悪

1ターン内で発話されたものでありながら、「ね」によって描写される事実や出来事の部分と、その後続く話し手のコメント部分では、全く性格が異なる。前者は、話し手の非独占的知識であり、かつ話し手が発話以前に所有していた知識である。反対に後者は、話し手自身の評価や気持ちを表わしており、その意味で話し手の独占的知識であり、そしてそれは必ずしも発話以前に所有されていたとは言えないものである。「ね」によって表わされる知識が、話し手の非独占的知識であるというのは、例えば例12

では級友達が、例13では他の客達が共有している知識であるからである。今ここで話し手がしている説明は、その場にいた人なら誰もがするであろう説明であり、話し手はそれを代表する形で話している。それはまた、その知識が発話以前に既に話し手や級友や客に所有されていたことを示すことになる。ここから判断すると、文中の「ね」によって作り出される共通の背景も、先行文脈と整合する文脈の要請という機能の中に入れこむことができる。但しこのような知識を、話し手が独占的知識とするか非独占的知識とするかは話し手自身が決めることであり、客観的な基準で決定されるものではない。

なお付け加えると、文中の「ね」は何度も重複して用いられるが、それは少しずつ情報を提供し、その都度その情報が共通の背景作りのためのものであることを明示する必要があるからであろう。文中の「ね」は使用頻度に個人差がある。あまり頻度が高いと幼い感じを与えるが、また頻度が低すぎると、共通の背景作りのものと認識させることが難しくなり、本来の機能を果たすことができないだろう(例8-2参照)。

例8-2 目薬をもらって、3カ月くらい、続けて
一日4回ずつだから、やんなさいって言
われてね、覚えちよる自信なんてないよ、
あたし。(作例)

次に文頭の「ね」を見ていこう。文頭の「ね」は相手の注意を引きつける、新しいテーマを導入するなどの機能があると言われることがある(Tanaka 2000)。例えば例14~16はいずれもこの発話によって談話内の話題が転換されていた。ところで、文頭の「ね」には疑問文が続くことが多い。新しいテーマには新しい共通の背景が必要であるが、それが既に聞き手の知識の中にあって呼び出させるだけでいいのか、それとも聞き手に知識がないので情報提供をする必要があるのか、話し手には分からないという状態で使用されるのが文頭の「ね」である。文頭の「ね」は新しい共通の背景を作り出す必要性のみを表示し、背景作りに必要な労力は聞き手の返答を待って決定しようとするものである。例16において相手が「あった、恐かったねえ」と言えば、共通の背景は既に出来上がったことになるし、「えっ、知らん」と言えば情報提供により聞き手に共通の背景を作らせる必要がある。

例14 ねえ, ミキ, 原チャで宮崎帰ったりせんのか?
ん?

例15 ね, よし子, 次, 語用論?

例16 ねえ, 昨日地震なかった?

最後の単独での使用は以下の括弧内に示すように省略形であると解釈し, 文末の「ね」と同様に扱うことができるだろう⁹⁾。

<単独で>

例17 P: わからないね, まだね

Q: ねえ (=まだわからないねえ)

P: うん

この節で述べたことを整理すると, 以下のようになる。「ね」は文末, 文中, 文頭, 単独で, と様々な位置で使用されるが, いずれも会話の開始, 継続を維持するための「共通の背景」の確立に向けられるという点で共通している。そして共通の背景は, 話し手と聞き手との間で, あるいは話し手と聞き手以外の特定されない他者との間で既に共有されている知識の中から呼び出されるものであった。その意味で, 共通の背景は, 先行文脈に整合する文脈内で解釈されるべきものである。その点で, 共通の背景という考え方は文脈指定機能の中に矛盾なく統合される。また, 共通の背景は共通である故に「話し手の非独占情報」であり, 1で見た「ね」の付加が可能な文と矛盾しない。また聞き手の縄張り情報であっても, 叱責, 非難, 激励の形をとって「よ」の付加があり得たことも説明できる。

5. 「よね」から見えてくるもの

ところで, 「よね」は「よ」と「ね」が複合したものと考えられている(蓮沼 1992)。しかし, そうすると「よ」と「ね」の相反する機能が共起するという矛盾が起きてしまうという指摘もまた多い(白川 1992, 金水 1993)。そんな中で, 少し視点の異なる議論をしているのが大浜(1996)である。大浜によると, 「よね」は会話の参加者が3人の場合に最も典型的に使用され, 「よ」と「ね」の向けられる相手が異なるという。

例18 浮輪をもった近所の子(A)に出会う

B: あら, 泳ぎに行ってきたの?

C: 今から行くのよね

(大浜 1996の例より)

Cの発話の「今から行くのよ」の部分はBに, そして「ね」はAに向けられたものであるというのである。「よ/ね」の文脈指定機能によれば, Cの発話にとっての先行文脈とは, いまだ問かけへの返答を得ていないBの場合「泳ぎに行ってきた」であり, 未だ答えていないAの場合「泳ぎに行く」であるとCは想定している。Cは当該発話をBには先行文脈と非整合なものとして, Aには整合したものとして解釈しよう意図していると言えよう。大浜(1996)は2者間の会話に現れた「よね」も話題の中にもう1人の人物がおり, 3者関係が成り立っていると述べている(例19参照)。第3者を見つけることが難しい例(例20~22)であっても, そこに相対立する2つの意見(Pと-P)が仮定され, その一方を支持する発話者が「ね」の向けられた聞き手とそれを共有しようとするという, 擬似的な3者関係が成立している。

例19 腰に鍵だの鎖だのをじゃらじゃらつけている子(A)がいることを話題にして

B: 邪魔にならんのかなあ

C: 貧弱な奴には似合わんよね

(大浜 1996の例より)

例20 私, 確か, 夕べ, 眼鏡ここに置いたよね

(蓮沼 1992の例より)

例21 私と歩くと恥ずかしいわよね

(蓮沼 1992の例より)

例22 君と一緒によく出かけたよね

ところで, このように解釈するとき, 当該の発話内容の発案者⁹⁾はもちろん発話者自身である。しかし, 話し手が発案者を「ね」の向けられた人物であると考えているという可能性はないだろうか。すなわち例18では近所の子(A), 例19ではBが言うはずのことをCが代わりに述べていると考えるのである。2者間のやりとりでも, 同様のことが考えられる。例えば例20では, 発話者は「眼鏡をここに置いた」

とは確信していない。置いたように思うが、置いていないかも知れないといった頼りない状況である。ここで仮に「ね」が向けられる聞き手が「本当にここに置いたの?(-P)」と聞くようなことがあれば、自分は「確か、ここに置いたよ(P)」と言うし、逆に自分の方が「ここに置いたかどうかわからない(-P)」と言えば、聞き手が「君は確かここに置いたよ(P)」と言うのではないかと考えているふしがある。すなわち、発案者は前者では話し手であり、後者では聞き手である。しかし、どちらの場合も話し手と聞き手は対立しているのではなく、「ね」によって同じ考えであるかのように装われている。例21でも、「誰だって恥ずかしいはずだ」という話し手の判断の言明(発案者=話し手)と、そこから推測すれば相手も恥ずかしいはずだという聞き手の気持ちの代弁(発案者=聞き手)が、「ね」によって混在した形になっている。例22は、明確に2つの意見(二人は一緒によく出かけた/出かけていない)が対立しているものではないが、架空に対立意見を設定することで、会話者同士の連帯が作り出され、共感の気持ちをより強めることを可能にしていると思われる。

ここで、発案者を発話者以外に仮定することができるのは「よね」ばかりではなく、「ね」においても可能であるという認識は重要である。従来、「ね」の機能が議論され、相手に同意を求める、同意を示す、相手に確認するなど書かれるとき、発案者が発話者であることが疑われることはなかった。しかし、「ね」が共通の背景を作るという機能であれば、発話者の発案に聞き手が同意することで共通の背景を作るという筋書きのものもあれば、発話者が聞き手の発案を代弁することで容易に共通の背景を作り出せるという筋書きも可能であろう。実際には、誰の発案か必ずしも明確でない場合もある(例23参照)。

例23 やっぱり出席の方がいいでしょうねえ。

「ね」が、(1)話し手と聞き手あるいは第3者に共有された知識を先行文脈とし、(2)それに整合する文脈を要請し、当該の発話を解釈させる中で、(3)当該の発話が発話者自身の発案ではなく、他者の発案を代弁していることがあるという可能性は、「ね」が多用される日本語の会話の展開構造を知る上で、重要な視点を提供してくれると思われる。

6. 結論

以上の議論から、終助詞「よ／ね」の本質的な機能は文脈指定機能であると言える。当該発話の解釈に必要な文脈を、先行文脈との整合／非整合を示すことによって絞り込む機能である。たとえ先行文脈が会話の中に見つけられない(「よ／ね」が会話の冒頭に現れた)場合であっても、以下のようにして作り出される共通の背景を媒介にして、先行文脈との整合／非整合という考え方に統合することができる。共通の背景は、会話者の共有体験の有無によって、3通りの作られ方があった。

- (1) 会話者間に共有体験がある場合：文末の「ね」によって、既にある聞き手の知識の中から呼び出すだけで共通の背景を作り出すことができる。
- (2) 会話者間に共有体験がない場合：文中の「ね」によって状況説明をする。聞き手は「ね」の存在によって当該発話が共通の背景作りに貢献していることを知らされる。
- (3) 会話者間に共有体験があるのか、ないのか分からない場合：これは、もっぱら新しい話題が導入される際のことである。文頭の「ね」によって、共通の背景が作り出される必要性のみが示される。相手の反応から(1)か(2)のいずれであるかを判断するための前段階の用法である。

このような背景をもつ先行文脈は、常に話し手と聞き手、あるいは話し手と聞き手以外の第3者が共有することを前提にしたものであるから、話し手の非独占情報に「ね」が付加されるという観察も、無理なくこの枠内に納めることができる。このように見えてくると、従来様々な異なる機能として提案されてきたものは、会話の成立を支える共通の背景の存在を前提にした文脈指定機能として統合することができる。

最後に「よね」の考察から、「ね」の付加された発話文では、発話者が常に発案者であるとは限らないということを指摘した。実際の会話では「よ」と「ね」の出現は決して対等ではなく、圧倒的に「ね」が多い。日本語の会話の特徴を考える上で、見のがせない視点であろうと思われる。

注

- 1) ここで用いる文脈とは、関連性理論で言われる文脈仮定のことである。

- 2) 大浜 (1996) は平行的, 対立的と表現している。
- 3) 「な」「の」をここでは「ね」と同種のものとして扱った。
- 4) 単独で使用される「ね」には, この他に, 話題の適切な終了を導く機能があるという指摘がある (Tanaka 2000)。
- 5) 本来発話したかも知れない人物 (実際の発話者も含まれる) を実際の発話者と区別するためにこの語を用いた。

参考文献

- Brown, Penelope/Stephen C. Levinson (1978) *Politeness. Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- 陳常好 (1987) : 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップを埋めるための文接辞—」『日本語学』第6巻第10号 93-109.
- Halliday, M. A. K. /Ruqaiya Hasan (1976) *Cohesion in English*. Longman. 安藤貞雄他訳 (1997) 『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房
- 蓮沼昭子 (1988) 「続・日本語ワンポイントレッスン」『月刊言語』第17巻6号 94-95.
- 蓮沼昭子 (1992) 「終助詞の複合形「よね」の用法と機能」筑波大学つくば言語文化フォーラム編『対照研究第二号 発話マーカーについて』63-77.
- Itani, Reiko (1996) *Semantics and Pragmatics of Hedges in English and Japanese*. Hituzi Syobo.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報の縄張り理論—言語の機能的分析』大修館書店
- 片桐恭弘 (1995) 「終助詞による対話調整」『月刊言語』24巻9号 38-45.
- 金水敏 (1991) 「伝達の発話行為と日本語の文末形式」『神戸大学文学部紀要』第18号 23-41.
- 金水敏 (1993) 「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』22巻4号 118-121.
- 北野浩章 (1993) 「日本語の終助詞「ね」の持つ基本的な機能について」『言語学研究』第12号 73-88.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 岡本真一郎 (1993) 「情報への関与と文末表現—間接形と終助詞「ね」の使用への影響」『心理学研究』第64巻第4号 255-262.
- 大浜るい子 (1996) 「関連性理論から見た終助詞「よ」「ね」の機能」『広島大学教育学部紀要』第二部 第45号 273-281.
- 大曾美恵子 (1986) 「今日はいいい天気ですね—はいそうです」『日本語学』第5巻第9号 91-94.
- 白川博之 (1992) 「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77号 36-48.
- Sperber, Dan/Deirdre, Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. 内田聖二/中邊俊明/宋南先/田中圭子訳 (1993) 『関連性理論—伝達と認知—』研究社
- Tanaka, Hiroko (2000) The particle *ne* as a turn-management device in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 32. 1135-1176.
- 山森良枝 (1997) 「終助詞の局所的情報処理機能」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社 130-172.